

メッセージアウトライン 創世記33:17～34:31「シェケムの悲劇」

[17]「一方、ヤコブはスコテへ移動し、そこで自分のために家を建て、家畜のためには小屋を作った。それゆえ、その場所の名はスコテと呼ばれた」

これは兄エサウとの感動的な再会、そして別れの後のことである。「スコテ」とは「小屋」の意味。エサウと再会した地点から北へ戻ってヤボク川を渡ったところにある。ヤコブのこの行為は明らかにその地に長期間滞在するためであっただろう。少なくとも数年は過ごしたのではないか。彼はメソポタミアからの長旅で疲れた家族や家畜のために旅を急がなかったのであろう。また彼はペヌエルでの神との格闘でびっこをひくようになっていたので、そのためとも考えられる。

[18-20]「こうしてヤコブは、パダン・アラムからの帰途、カナンのあるシェケムの町に無事に着き、その町の手前で宿営した。そして、天幕を張った野の一面を、シェケムの父ハモルの息子たちの手から百ケシタで買い取った。彼はそこに祭壇を築き、それをエル・エロヘ・イスラエルと呼んだ」

これはスコテで数年間過ごした後のことである。ヤコブの一行はスコテからついにヨルダン川を渡って、西側のカナンのある地へ入り、そこから西へ約20キロメートルほど行った地、シェケムの町の手前で宿営した。彼がメソポタミアの叔父ラバンのところへ行く時に最初に神が現れたベテルまでは、あと南へ約30キロメートルの道のりである。彼はカナンのある地へ入ることは入ったが、行くべき場所はやはり、メソポタミアへ行く時に枕にした石を取り、それに油を注いで神に無事に帰ることができるようにと神に誓願を立てた(28:18-22)ベテルでなければならない。それが彼の原点であり、祝福となり、導きの始まりの地であった。彼は行こうと思えば一日で行けるのに、シェケムに落ち着き、そこで町の住民から土地まで買う。「百ケシタ」…一ケシタは羊一頭分に相当する銀の量と思われる。ヤコブがこの土地を買ったのは、そこが交易上、北と南を結ぶ重要な地であり、そこで家畜の売買などの商売に携わろうとしたからではないだろうか。彼はアブラハムやイサクと比べてはるかに野心的な人物であった。彼は自分を祝し、守り、導いてくださる神を礼拝するためにその地に祭壇を築いた。その名の意味は「イスラエルの神である神」または「神はイスラエルの神」である。「イスラエル」はペヌエルでヤコブに与えられた新しい名前であり、それをここに含ませることによって彼の信仰告白となっていると思われる。しかしながら彼の行くべき地はやはりベテルであり、いくら商業的に便利であってもシェケムは定住の地ではない。このことはやがて大きな問題をもたらすこととなる。

[34:1-5]「レアがヤコブに産んだ娘ディナ」(1) 男ばかりの兄弟の中で彼女だけが唯一の娘であった。この頃はもう十代の半ばか後半になっていたであろう。彼女はその土地の娘たちを訪ねようとして出かけた。「すると、その土地の族長であるヒビ人ハモルの子

シェケムが彼女を見て、これを捕え、これと寝て辱めた」(2) シェケムは一目見て彼女を気に入ったようであるが、すぐさま手を出して自分のものにしたというところに、このカナンが地がいかにかに道徳的、社会的に腐敗した状態にあったかということがわかる。しかも彼は自分の行動に罪悪感をもたなかったようである。シェケムは彼女を愛して、正式に自分の妻にしようと自分の父親のハモルにヤコブの一族との交渉を願う。(3-4) 若者らしい性急さである。

一方ヤコブはこの事件について聞きながら、すぐには行動を起こさず、息子たちが家畜の放牧から帰るまで黙っていた。(5) 移って来たばかりのこの土地で問題を荒立てたくないとの思いがあったのかもしれない。

[6] 「シェケムの父ハモルは、ヤコブと話し合うためにやって来た」

これは息子の結婚のための交渉であって謝罪ではない。彼も息子の取った行動が別に謝罪や弁明を求められることだとは思っていなかったようである。

[7] ヤコブの息子たちが野から帰って来て、この出来事を聞いた時、彼らは心を痛み、激しく怒った。これが普通の反応であろう。「このようなことは、してはならぬおいことである」しかし、してはならないことが実際に起こってしまった。この世界にはこのようなことがしばしば起こって来る。そのようなときに私たちはどのような行動をするのだろうか。

[8-12] シェケムの父ハモルは息子の結婚の交渉をする。そこにはシェケムも同行していた。ハモルはディナを息子シェケムの嫁にと願い、シェケムも、どんなに高い花嫁料や贈り物であってもするからと願う。お互いのグループの結婚による姻戚関係、同盟関係の促進は市民権の確保、生活の安定につながるが、同時にそれは血が混じり合うということであり、地元のカナン人への同化を意味する。これはすなわちアブラハム以来の神の選びの民という立場への重大な脅威となる。

[13] ここでヤコブがどのように答えるか思案しているところ、父に代わって息子たちが前面に出てくる。ヤコブはこの頃七十歳前後になっていたと思われる。彼らはシェケムとその父ハモルを「だまそうと」した。別訳「悪巧みをたくらんで」。彼らの腹の中は妹の受けた屈辱に対する復讐のことばかり考えていたのであろう。アブラハム以来の信仰者の家系であっても悪をたくらむのである。ここに人間の持つ罪の根深さ、恐ろしさ、強かさということを思い知らされる。もっとも、ヤコブが子どもたちに積極的に神を恐れ、悪を遠ざけて善を行うこと、神を礼拝すること、みこころを求めることを教えていなかったのではないかということも考えられる。ヤコブは二十年間の叔父ラバンのもとの苦労やペヌエルでの神との格闘の経験を通して、神の祝福がなければ何もなしえないということ、神を第一にして生きるということがわかっていたであろうが、それが子どもたちには十分には伝わってはいなかったのではないか。彼は自分がわかっていることは子どもたちもわかっていると思っていたのであろうか。しかし、子どもたちは親とは別人である。今日でも幼児洗礼を受けていても、その子どもたちを信仰告白へと正しく

教え導き、育てていくのはその家庭と教会のなすべきことなのである。クリスチャンの家に生まれたから放っておいても大丈夫ということはない。子どもにも罪の性質はある。神を愛し、神を恐れ、善を行い、神のみことばに従うことを教えていかなければ、子どもたちは悪い道を選ぶかもしれない。

ヤコブの息子たちは妹が汚されたことを聞いて怒り、復讐の思いに燃え、悪をたくらんだのである。

[14-24] 彼らはハモルとその町に住む男子全員が割礼を受けることで彼らと一緒にすることに同意すると提案した。(14~17) 割礼は神がアブラハムとその一族に命じられた時以来の神の契約の民としてのしるしである。(17章) この割礼を悪だくみの材料としたところにヤコブの子らの信仰的な感覚の大きなずれがある。これは神との神聖な契約のしるしを軽く扱い、神を汚し、自らを欺いているのである。

ハモルの子シェケムにとっては、この条件さえ満たせば自分の希望どおりになると考え、ためらわずにこのことを実行した。(18~19) そしてまた町の人々にも同様に勧めた。そうすれば彼らは自分たちと一つとなって彼らの財産や家畜も自分たちのものになるのではないかというのである。これは町の住民たちの欲望をそそる甘いことばであり、それでその町のすべての男たちは割礼を受けた。(20~24)

[25-26] 割礼をすると三日目くらいに激痛が襲うと言われている。人々は満足に動くこともできないような状態であったのであろう。この時、ヤコブの二人の息子、ディナの兄シメオンとレビがそれぞれ剣を取って、難なくその町を襲い、すべての男たちを殺した。ディナもシメオンもレビも同じ母親レアから生まれているので特に結びつきが強く、この二人が復讐を実行したのである。そしてハモルとその子シェケムも殺され、ディナは取り戻された。

[27-29] 「ヤコブの息子たち」(27)とはその他のヤコブの子どもたちをも含めた表現で、彼ら全員が盗賊のようになって町中を荒らし、略奪したのである。彼らは家畜や財産、妻たち、子どもたちまで全部とりこにし、略奪した。神の契約の民が血に飢えた盗賊に変身してしまったのである。

[30] 「それで、ヤコブはシメオンとレビに言った。『あなた方は私に困ったことをして、私をこの地の住民カナン人とペリジ人に憎まれるようにしてしまった。私は数では劣っている。彼らが一緒に集まって私を攻め、私を打つなら、私も家の者も根絶やしにされてしまうだろう』」

この時になってヤコブはようやく口を開く。どうしてヤコブは沈黙していたのだろうか。子どもたちのやったことが後になって知らされるまで、彼は何も知らなかったのだろうか。何か父親としてのヤコブの存在感が薄くなってきているように感じられる。彼はここで事件の中心人物のシメオンとレビを叱責しているが、今一つその口ぶりに厳しさが足りないようにも聞こえる。もはや万事窮すという悲痛な思いが先行し、父親の威厳をもって厳しく叱るということができなかったのだろうか。本来ならばヤコブは子どもた

ちが早まった行動をしないように、前もって注意をしておくべきではなかったか。子どもたちの突出した行動とそれにうろたえる父親の姿がここには見える。

確かにヤコブにしてみれば、この事件によってこの地域の住民の怒りを買って、彼らによって今度は自分たちが根絶やしにされるのではないかという恐れはあった。そうすれば神がこのカナンの地を与えてくださり、祝福してくださるというアブラハム以来の約束はどうなってしまうのかという心配もあったであろう。

[31]「彼らは言った。『私たちの妹が遊女のように扱われてもよいのですか』」

シメオンとレビの行った悪に対して、これは正当な理由にはなっていない。悪をもって悪に報いることは神が決して教えておられないことである。→ローマ12:17-19

彼らがこのような恐ろしい悪に走ったことの原因は究極的には人間の持つ罪の性質にある。→マルコ7:21-23 ヤコブの家庭に目を向けるならば、その子どもたちが神の契約の民としての模範を父や母にあまり見いだせなかったのではないかという点と、やはり一夫多妻の家庭のゆえの複雑さと不安定さがあつたのではないかという点である。子どもたちは長ずるにつれて、力をつけてくるにつれて、その不安定さが増幅し、歯止めがきかなくなっていったのではないか。

私たちはここから教訓を学び、すべての人間にアダムとエバ以来の罪の性質が及んでいるということ、それゆえ人間は悪へ走りやすいことを覚え、信仰をもって生きていくということはどういうことなのかを具体的に子どもたちへ教え、自らが良き模範となり、神を愛し、神を恐れ、善を行い、互いに愛しあい、赦しあい、神のみことばに従うことと、自分の罪深さ無力さを認めて、全面的に神と主イエス・キリストにより頼み、聖霊の力によって良き実を結ぶことができるように生きていく必要がある。

→第二テモテ3:15-17